

蕨学園「落語を楽しむ」

第 27 回 鑑 賞 会

2018. 7. 11

夏だ！お化けだ！幽霊だ！ 怪談噺



1. 会 場 蕨市民会館会議室 401 室
開場 13:20、開演 13:40
2. 内 容 柳家三三「豊志賀の死」38 分
2011. 7. 13 国立演芸場で収録、37 才
柳家小三治「もう半分」38 分
1983. 1. 25 国立劇場小劇場で収録、44 才
口直しに人情噺…人情噺と言えばこれ
古今亭志ん朝「芝浜」46 分
1980. 11. 26 国立劇場小劇場で収録、42 才
3. 参加費 100 円（会場費の補填）

※打ち上げ 「鳥良商店 蕨西口店」 駅歩 1 分、須賀家の隣の隣。
恐れ入りますが、7 月 4 日までに①出席・欠席、②打ち上げの
参加・不参加のご連絡を高橋までお願いいたします。

「豊志賀の死」の前編

「豊志賀の死」は、三遊亭圓朝が常陸羽生村で殺された累(ルイ)という女の怨霊談を基にして、創作した噺『真景累(カサネ)ヶ淵』の第3話になります。当時の流行語「神経」を「真景」と読み替え「真景累ヶ淵」としています。

按摩の怨念が、自分を殺した旗本の親族や家来、自分の娘まで巻き込む因縁噺ですが、単なる怨霊の話ではなく、人間の業の深さを表した圓朝の名作です。大変に長い物語で三遊亭圓生の噺では8時間に及び、寄席では連続物として演じられていました。



第1話「宗悦殺し」

根津七軒町に皆川宗悦という按摩があり、女房を亡くし十九と十六になるお志賀(豊志賀)、お園という二人の娘の成長と、貯めた金を高利貸で増やすのを楽しみにしていました。ある寒い夜のこと、宗悦は娘の志賀が雪になりそうと止めるのも聞かず、小石川小日向服部坂に住む旗本 深見新左衛門の家に借金の取りたてに向かいました。

深見新左衛門は 250 石取りですが役職に就けず苦しい世帯。酒乱の気があり朝から酒を飲み続けているところへ宗悦がやって参ります。お金をお返しいただきたい、金はないと話すうちに言い争いとなり、新左衛門は宗悦の無礼に激昂し、峰打ちにしたつもりが斬り殺してしまいました。

新左衛門は下男の三吉にツヅラを買わせ、油紙に宗悦の死体をくるんで中へ入れて「これを背負って何処かへ捨ててこい、口外は無論、屋敷に戻ってはならぬ。」と言って5両を渡します。捨てられたツヅラを見つけた者が、自分の盗まれたものだと言って長屋の自宅に運び込むと、これを隣の駕籠かき2人が盗み出して中を確かめると死体。身元が皆川宗悦と分かり、お志賀の話から新左衛門のところへも問い合わせますが、「借りた金を返してご馳走をして返した。その後は知らぬ。」と言い逃れました。

深見新左衛門の妻は、夫が宗悦を殺した事を気に病んで寝たり起きた

りの生活となります。新左衛門は、剣術指南所に出していた長男の新五郎を呼び寄せ母親の看病をさせ、台所のことは深川からお熊という女を頼み入れます。やがて新左衛門とお熊は深い仲になり懐妊しました。

あわよくば正妻になれると考えたお熊は、新五郎や奥方のことを悪く言い、新左衛門はこれを真に受けて新五郎を叱責するので、新五郎は家を出て奥方の病状も次第に悪くなります。新左衛門は、鍼でも打てば少しは良くなるかと、流しの按摩を呼んで鍼を打たせます。いくぶん良くなりますので日々治療に通わせましたが、最後にみぞおちに打った鍼が悪く、後からじくじくと水が出るようになってしまいました。

それきりその按摩は姿を見せず、12月になって按摩の笛を聞いて呼び込みますと、鍼を打った者ではなく別人です。新左衛門が仕方なく肩を揉ませていると、按摩が宗悦の幽霊に変わります。刀を抜いて斬り殺したと思えばこれが奥方。後先の分からなくなった新左衛門は隣家にも切り込み、逆に殺され乱心のかどで家はお取り潰しとなりました。門番の勘蔵が幼児の次男 新吉を連れて出ました。



第2話「深見新五郎」

家を出した新五郎、田舎で暮らしていましたが江戸が恋しくなり、久しぶりに屋敷に帰ったところ家は空き家となって荒れ果てています。菩提寺で家を取り潰しとなった経緯を聞いた新五郎、絶望して墓前で切腹をしようとしたところ、通りかかった質屋下総屋の主人に諭され、新五郎は下総屋で働き始めました。

下総屋の女中 お園は器量も気立ても良く、新五郎はお園に想いを寄せて何かとお園に親切にします。このお園は宗悦の次女で、新五郎が父親を殺した深見新左衛門の息子とは知る由もありませんが、なぜか新五郎の顔を見るだけでもぞっとして寄せ付けません。

ある日お園が病気になり、新五郎はよく看病をし、下総屋の主人は若い男女のことと心配をして「女の部屋に男が入るのは拙い、気を付ける

ように。」と新五郎に言いますが、新五郎はお園の看病を続けます。

新五郎の看病の甲斐か、いくらか良くなったお園が針仕事をしておりますと、得意先でご馳走になり少し酔った新五郎が部屋に入って来ます。

「夜も遅いので早くご自分の部屋へ。」と言うお園に、一服させてくれと行灯の灯で煙草を付け何やかやと言い寄ります。「お前に惚れている、お前の床の中へちょっとでいいから寝かせてくれないか。」と言います。断り切れず床に入れますがお園は外を向いて体を固くして新五郎を見向きもしません。お園はさらに体を固くしてびくともせず、新五郎は諦めて自分の部屋へ戻りました。

幾日か過ぎた日、蔵の塗り替えがあり職人が夕食をしている。漬物が無くなったというのでお園が物置に取りに行きますと、後から新五郎が追いかけてきて「お前のことが思い切れない、一度でいいから」と嫌がるお園を藁の上に押し倒します。しかしこの藁の中には押し切り(藁切包丁)があり、その上から新五郎が押さえつけましたので、お園は脇腹からあばらへかけての傷で絶命となります。もう仕方がない、毒くわば皿までと店の金百両を盗み、今は仙台藩の剣術師範となった剣の師匠 黒坂一斎を頼って仙台へ逃げてしまいました。

1年後。黒坂一斎が亡くなり、仙台に知人のない新五郎は江戸へ戻ります。以前深見家に奉公していた勇二を頼って本所松倉町へ行きますが、勇二の娘 はるが応対に出て、勇二もすでに亡くなったと言います。はるは新五郎をもてなして、今宵の泊りを勧めます。しかし、はるは新五郎がお園を殺して金を取って逃げたことを知っており、夫で同心の森田金太郎へと知らせました。

新五郎、踏み込んできた森田金太郎を斬って逃げますが、周りは捕り方に囲まれている。二階の物干し伝いに逃げ回り藁束に飛び降りますが、そこには押し切り。そこへ飛び降りましたから土踏まずを深く切り込んで動けず、新五郎は捕り押さえられました。

これが 11 月 20 日、お園が死んで三年目の祥月命日でありました。